

2025 年 5 月 20 日 上田 勉

地域になくてはならないもの―祭りや民族芸能は続けられるのか

東日本大震災と福島第一原発事故は、浜通りの人口減少・少子高齢化・地方衰頹を一層加速化させました。

地域は、単に衣食住だけではありません。人は地域のコミュニティや風俗習慣がなければ生活をすることができません。大震災や原発事故は、生業（なりわい）や学校・神社や寺だけではなく、地域そのものを壊してしまいました。避難した住民の多くが街に戻って来なければ、地域そのものが無くなってしまうのです。地域が無くなれば、祭りや民族芸能も無くなってしまいます。今東北の祭りや民族芸能は、存続の危機に立たされています。

祭りをするのにも、担ぎ手が集まりません。地域住民だけではなく、地方からのボランティアや地元の企業の人達が、参加しています。

民俗芸能も、小学校や中学校・高等学校で、教育の一環として練習しています。大学の学生がボランティアで参加することもあります。

財政的にも厳しいです。自治体や地元の企業にも援助を求めます。企業や商店が再開しないで閉店してしまったことも、財政的には厳しいです。

震災半年後から、民俗芸能を復活した地域もあります。福島県浪江町の請戸の田植え踊りです。指導者の佐々木愛子さんが、6 か月後に避難している子供たちを集めて、練習を開始しました。そして、仮設住宅で田植え踊りの復活を披露しました。避難をしていた住民の多くが踊りを見て、涙を流しました。

祭りや民族芸能が無くなって初めて、祭りや民族芸能は、地域の人達を勇気づけるのに、無くてはならないものだ、と言うことに気づきました。

双葉郡の各町や村では、夏祭り（お盆）や秋祭り（収穫祭）が復活しました。参加者は少ないですが、年々増えています。祭りの実行委員には、新しく住民になった若者達も参加しています。

毎年 8 月は、東北の各地で、夏祭りや盆踊りが開催されます。仙台七夕祭り、盛岡さんさ踊り・青森ねぶた祭り・秋田竿灯祭り・山形花笠踊りが、東北 6 大祭りです。しかし、これらの祭りは感動しますが、観光化されてしまっていて、私は余り好きではありません。それよりも、地元の地域で引き継がれている、地元の祭りや盆踊りが、私は好きです。

“東北の夏・短い夏・夏祭りの夏”。東北は、冬は長くて夏は短いです。だからこそ、庶民のエネルギーは、夏祭りで最高潮に達します。出演者は、この日のために 1 年間練習するのです。

東北でも、商業で栄えた地域がありました。現在は以前ほど賑やかではありませんが、昔の街並みを残している町もあります。秋田県鹿角（かづさ）市の鹿角花輪の花輪ばや

しもその一つです。山車（だし）が、駅前に集合する様は、壮観です。



【請戸の田植え踊り（福島県浪江町）】（2024年2月18日撮影）



【花輪ばやし（秋田県鹿角かづの）市】（2023年8月19日撮影）